冬のセキレイ

吉田宏子

散歩道でセキレイを見た。残雪に照らされ長い尾の先まで輝いている。恐れることもなく、足元近くを過ぎていく。この時期のセキレイは美しい。

正月気分も抜けきらない八日、八十四才になる田舎の母が倒れ、救急車で街の病院に運ばれた。「余命三ヶ月」突きつけられた医師の言葉に娘三人はうろたえた。今まで病気らしい病気などしたことがなかった母が聞く。

「どうして家から遠い街の病院なの」

「胃潰瘍だったけど、町の病院にベッドの空きがなかったからよ」

細心の注意をはらっているつもりでも、母は何かを察するらしく、黙り込み、体までも萎んでしまう。このままではいけない、希望の灯りは最期まで灯していこう、と思った私たちは口裏を合わせた。

「おばあちゃん、春の彼岸には一緒にお墓参りに行こう」

「退院して家に帰れるんだね。本当だね」

母の顔がぱっと明るくなり、春を待ちわびながら、自分の幼かった頃のことをぽつりぽつり話し始めた。笑い声も聞かれ、快方に向かうかと思うこともあったが・・・

その後、母の強い希望で、家の近くの町の病院に転院した。

吹き付ける吹雪の中、コートの襟を立て、聳え立つ群青色の七ツ森連邦を横目に、凍てつく道を急ぐ。ドアを開ければ、そこは生と死のせめぎ合いの場。細胞のひとつも見逃さない執拗な攻撃に、知性も人間性も失われ、ただ一筋残っている本能が必死に抗う。一晩中痛む所をさすり、やっと母は眠りにつく。

緊張の解けない日が続いていた。闇が藍色に変わる早朝、コンビニの滲む明かりの中に、人間の営みの気配を探して、結露のかかったガラス戸越に眼をこらす。

そんなある晴れた日、セキレイが一羽、病室の窓辺にやってきた。ツツッとコンクリートの雪の塀をいく。ガラス戸ひとつ隔てたこちらの目など一向気にせず、陽射しを楽しむかのように、細かいステップで、端から端まで飛び跳ねていく。

――生きるってこんなに軽やかですよ――体全体で喜びを表している。

母の口から亡くなった人の名が出、幻覚が現れはじめる前頃だった。
ざらめ雪の上をいくセキレイは、相棒を連れていた。軽やかさを眼で追いながら、私は、雪の溶け具合から、陽の光の優しさ、空の高さを思い、澄み切った空気の清々しさを想像していた。
その時、布団を深くかぶった母のくぐもる声がした。
「私は、行きたくない、行きたくないって泣いたのに」
最初は耳を疑った。何を言っているのか分からないほどだった。少し落ち着くと、以前に聞いた、同じような場面を思い出した。

あれは息子の親友のお母さん、美紗子だ。美紗子は病院のベッドに横たわる母親に聞いた。「母さん、どうして私だったの」
小学三年生の美沙子は、子どものいない親戚の堂島家に養女に出された。四人姉妹のうちのどうして自分なのか。あぶれていたから自分が選ばれた。それでは人身御供ではないか。ちょっと見は可愛い一番上の姉さん、どこまでも自分の考えを押し通す二番目の姉さん、末っ子がはずされるのは分かるが、どうして三番目の自分だったのか。
実家の萩野の家に通じるバス通りを知ってからは、その道を今日折れようか、明日折れようかと考えた。角の家は、石垣が積まれたお屋敷で、ちょうど今頃は、フェンス過ごしにしゃらの花が咲いていた。萩野の家にもしゃらがあって、うつむきがちの花びらの細かいフリルが可愛いいと、萩野の母が言ったことを子ども心に覚えていた。その道が、萩野の家に通じる近道だと言うことは、誰も教えてくれなかった。
ある時、角の屋敷のしゃらの白い花と真ん丸い蕾を見たとたん、泣き出したいような、ただもう、無性に萩野の家に帰りたくなってバスに乗ったことがあった。
堂島の義母からは、いつも何かしら注意をされていた。感情のぶつかり合いをしていたら、もっと近寄れたかもしれないが、義母は望まなかった。二人の間が良い感じになったのは、義母の望む人と結婚し、子どもができてからだった。義母は子どもができなかったわけだから、それは子どもたちを可愛がってくれた。男の子、洋介の場合は特別だった。
「美紗子さん、こんなに可愛いものつけている」って、よく笑ったものよ。
そして男の子はピカピカに光っていなくてはいけないと言って、洋介は洋服から、

自転車、そのほか細かい持ち物までピカピカに光っていた。そのくせ女の子はお下がりで良いって言うの。おかしな話だけど、堂島の義母の深い気持ちが分かって、はい、そうですねって従っている。

萩野の母が入院して、何度か見舞いに行っているうち、私は、今聞かなければ一生自問自答することになると思って、母の体調の良い時にさりげなく切り出してみた。

「母さん、どうして私が堂島の家に行ったの」母はあっけらかんと言ったの。

「美沙ちゃんが一番賢くて可愛かったからよ」

これまで心に引っかかってきたことがこれだったかと思うと、ばかばかしくなって、両親が良かれと思ってやったこと、余計な詮索はよそう。堂島の家にきてよかったと思えるように生きよう。そう決心がついた。

しゃら、やっぱり植えたわ。小学生の頃の、裏切られたような、寄る辺のない、泣きたいような気持ち。しゃらの花越しに聞こえてきた、弾むような甘えた女の子と母親の会話。あの時の気持ちを私は随分長く引きずっていたけど、あれが私の原点だっていうことに変わりはない。そう考えて植えたのよ。今はすべてに感謝している。

美紗子の言葉が鮮やかによみがえった。

確かに母は五才の時、年の離れたいとこである、子どものいない祖父、祖母夫婦の下に養女にきた。男兄弟の多い中で、泣いていることが多く、不憫に思ったと祖母から聞かされていた。成績が良く、母は高等女学校にも行ったという。

その後結婚し、父の故郷の宮城県にきたが、北海道の兄弟とも交流があり、秋には宮城米を送り、向こうからは新巻鮭が送られてきた。身欠きニシンが軒先に吊り下げられていたものだ。倒れるまで短歌会に出席し、歌を詠んでいた。すべてを納得しての母の人生だと思っていた。

「私は行きたくない、行きたくないって泣いたのに」母の言葉が胸に残った。

ベッドが取り払われ、母の部屋に、障子越しにほの白く陽がさしこんでいた。

そういえば、私が子どもの頃、実家の道路に面した生垣には、ポプラの木が植えられていた。ポプラは北海道の原風景につながる。

ひし形のような卵型の緑の葉が、さわさわと風にそよぎ、空高く伸びていった。落雷を心配する頃、街から下駄屋がやって来て、下駄の材料となって引き取られていった。

美紗子の心の中にしゃらがあったように、母の心にはポプラがあったのだ。
残念なことに、一緒に苗木を植えた父は、六十才にならずに亡くなった。
「父さんが亡くなって、私の人生つまらなくなった」と母は嘆いたことがある。私は、この言葉を結びつけて、自分の答えとした。
あれから何度もの冬を送った。厳寒に耐える群青の山々、最後の一片の細胞までも叩きのめす敵との壮絶な闘い。濡れた結露の窓ガラス越に見た、闇の中に動き出す人々。生きることの極限の厳しさを知らされた。そして最後は、告知をしなかったことを自問自答した日々。

今年も柔らかな陽射しの中を、天からの使者のようにセキレイがいく。雪の解けた舗道を清々しく、けざやかにセキレイがいく。ひとしきり南天の葉をついばんだ後、冬の陽が屋根に反射してまぶしく光る、中空に消えていった。